

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名：横山太郎

横山太郎氏の博士学位請求論文『世阿弥発見 近代能楽の思想史的研究』は、1909年(明治42年)吉田東伍によって『世阿弥十六部集』が出版されたことを世阿弥発見と名づけ、世阿弥発見及びそれに続く一連の言説を、従来のように能楽史の中だけに位置づけるのではなく、思想的・社会的コンテクストの中に位置づけることを試み、全体としては、世阿弥を鏡として日本近代思想の欲望を読み込もうとする意欲作である。

第1章は、世阿弥発見前史として、明治維新によって壊滅的状况に追い込まれた能・狂言が「能楽」という名前の下、新たな社会的存在に生まれかわり、近代社会に適應していった有様を、岩倉具視を中心として推進された芝能楽堂(能楽堂もこの時期の発明である)の建設という出来事を軸に描いている。

第2章では、岩倉中心の貴族趣味的な理念による能楽保護事業が限界に直面した後、池内信嘉を中心に、新たな理念の下で能楽保護事業が展開される様が述べられる。池内の戦略は、能楽を国民文学の中に位置づけることで、公的な保護の対象とするというものであり、池内によって組織された「能楽文学研究会」の主要メンバーの一人吉田東伍が、この会の活動の中で世阿弥の遺著を発見し、それを『世阿弥十六部集』として翻刻・出版するまでが語られる。

第3章では、明治末に世阿弥発見がなされた後、大正期に世阿弥受容がそれほどの進展を見せないことが、この期の数少ない重要な受容例とともに示される。

第4章では、昭和初期になって、世阿弥ブームというべき状況が出現したことが述べられる。これを担ったメディアが岩波書店の雑誌『文学』であった。またこの時期の世阿弥言説の中核を担ったのが、大正教養主義を主導した知識人で夏目漱石門下の野上豊一郎、阿部能成、小宮豊隆らであり、彼らの教養主義の強い影響下にあった世阿弥学者、能勢朝次、西尾実たちであった。この章では、大正教養主義の思想的欲望によって召喚された世阿弥が語られている。

第5章では、教養主義に特有の近代的な個人主義の眼差しが、理論的思考の単独性において歴史上に屹立する世阿弥を見出すという局面が述べられる一方で、たとえば能勢朝次が西田哲学に拠りながら世阿弥を解釈しようとするとき、それが民族的全体性へと世阿弥を還元しかねない傾向が指摘される。

終章では、能勢朝次にあった、民族的全体性への世阿弥思想の還元という見えない前提に立って、戦後のいわゆる「日本の身体論」の言説が流通していることに対する批判が述べられている。

審査委員会では、1～3章の歴史叙述部分のヴィヴィッドな記述に比べ、4章以降の言

説分析部分に多少、ステレオタイプ化が見られ、記述に精彩を欠くことへの批判や、日本の身体という問題において、文化還元主義的思考を全面的に捨て去れるものか、という疑問が出されたりはしたものの、全体として、この論文の出現によってはじめて、世阿弥発見が日本近代思想史上の事件として記述されたことの意義は大きい、という認識では各委員一致した。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。